

第五章 ギリシヤ

一 アテネの宿とイースターエッグ事件

アテネでの最初の宿は、フェリーとバスで一緒だったイギリス人のバックパッカーたちと同じところだった。ただし、あまりにも騒がしい宿だったので、二日目からは新しい宿に変えた。その宿は、騒がしくはなかったが、大部屋の四隅に寝台のみが置いてある安い宿（一泊500円程度）であった。朝私起きるといつもベッドの他の住人はみんな寝ており、私が宿に帰り眠る間までは誰も帰って来ずベッドは空だった。この同宿者たちとのすれ違いには違和感を覚えていた。夜早く寝る自分を変なのかとも思っていた。

そうした日が普通であったが、ある日、その同宿者から声を掛けられた。

「パーティを別の部屋でやっている。一緒に行こう」

「いやいや、僕は遠慮しておく」

「そう言わず、行こう！」

断れず、一緒に行くことにした。部屋に着くと、みんなで飲んだり、食べたりしていた。そして、真っ赤な卵を食べるよ
うに勧められた。

「さあ、この卵を食べなさい」

「いやいや、そんな色の着いた変な卵は、日本人は食べない」

想像だが——「これはお祭りの定番の食べ物だから食べなさい」

「いやいや、変なものは食べたくない」

押し問答をしたが、結局、断って食べなかった。そして早めに自分の部屋に戻った。旅行から帰ってこの事は忘れていたが、テレビでイースターエッグのことを紹介していた。ギリシャでのイースターの正確な日付は分からないが、お祭りⅡ復活祭Ⅱイースターのごちそうの一つとして赤く色づけした卵を食べることは慣習とのことであった。そのことを知らなかった自分がお粗末である。知識がなくお祭りムードに参加しなかったことを申し訳ないと今は思う。やはり、旅先の文化などを前もって調べておくこと、もしくは教養として一定レベルの知識を持つておくことの大切さを思い知った出来事であった。こんな時に、ジャンプできない小心な自分が出ていたと思う。

二 パルテノン神殿とアテネの市街部

アテネでのハイライトは、やはりパルテノン神殿の見学である。アテネの中心部にあり、宿から歩いて行くことができた。丘の上にあるので遠くからでもよく見えて迷うことはなかった。遺跡に特に興味があるような自分ではなかったが、これが西洋文化の起源の一つとされる建造物と教科書などで紹介されていたので、何枚も記念写真を撮った。

宿への帰り道の途中、路地裏からエキゾチックな音楽が流れてきた。音楽を奏でて踊っている様子だった。音楽が東方を感じさせ、ヨーロッパというよりも、中東と思われる雰囲気があった。これより、さらに東方に行けば、トルコのイスタンブールである。結局、先の日程を考えてギリシャより東方へは行かなか



アテネ

た。イスタンブール¹へ行かなかったことは残念である。

アテネ市内を歩き回ると大道芸人のショーに出会った。これにもヨーロッパとは違う雰囲気を感じた。なお、アテネでは、一本五十円くらいのシシカバブを四本も食べたが、安くてしかも美味しかった。



パルテノン神殿



アテネでの宿の前の通り

1 イスタンブールへは行けなかったが、アテネよりさらに中東を感じさせる都市である。最近、テレビで『007/ロシアより愛をこめて』をたまたま観たが、この映画を、1966年、高校進学で佐世保に下宿した直後、下宿を世話してくれたEさんの案内で、佐世保市で最も有名な映画館「カズバ」で観たとの記憶がある。イスタンブールのモスクのシーンは今見てもエキゾチックな雰囲気十分。この映画の冒頭・ラストではベニスも出てくる。イスタンブールのシーンは、『名探偵ポワロ/オリエンタル急行の殺人』がもっと素晴らしいと思う。なお、佐世保で観たのは『サンダーボルト作戦』かも知れない。記憶が曖昧である。



路地裏から音楽が



大道芸人のショー

三 イドラ島などへの島めぐり日帰りツアー

エーゲ海の島々は、白い家並みなどの景観が有名である。特にミコノス島・サントリーニ島が有名であるが、アテネの港・ピレウス港からの日帰りツアーも用意されていた。こちらは、イドラ島などを巡るもので、料金も手が届く程度だったので参加することにした。上陸した島はイドラ島であった（五月六日であった）。白い家並みは十分見応えがあった。また、上陸した島で革製のベストを自分用に買った。このベストは帰国してからも二十年間程度は愛用したと思うが、その後、誰かにあげってしまった。

また、ギリシャでは、タコを含め魚介類が多く食べられていた。イドラ島でも昼食に食べたが（一皿300円程度）、美味しかったのでアテネに帰ってから、また魚介類を食べた（小エビ、カニ、ビール、パンで2250円程度、食べ過ぎた）。



イドラ島



イドラ島にて
(購入したベストを着ている)



イドラ島にて

四 デルフィへの日帰りツアーそして再びイタリアへ

デルフィは、アテネの北西約180 kmの山間地域にある有名な遺跡である。バスツアーに申し込めば、少し遠いが十分日帰りツアーが可能である。ガイドは英語のみで日本人の参加は私のみであったが、英語の案内は少しだけしか聞き取れなかったが、劇場跡などを楽しめた。

ただし、帰り際に少々不快な思いをした。ツアー一行でお土産屋に寄ったが、万引きか何かがあった模様でツアー一行が疑われ、私一人がアジア人であったためか、疑われたような質問があった。英語の遣り取りで正確には分からないが、疑われたことは間違いないと思う。大きな問題にはならなかったが、アジア人への差別みたいなのを感じた。ヨーロッパ旅行中、人種差別的なものを感じたのはこの時のみであった。



デルフィ



デルフィの劇場跡

こうしてギリシャの旅を終え、再び、同じ経路でイタリアに戻った。そして、イタリアを北上し、ウフィツ美術館などで有名なフレンツェを目指した。なお、気まずい思いの経験をしたが、ギリシャに悪いイメージはまったくない。